

阮籍の「詠懷詩」(三)

鷹橋明久

前回(本誌第三十四号)は阮籍の「詠懷詩」——其六から其八までを取り上げ、その訳注を試みたが、今回は、「詠懷詩」——其九から其一二までを取り上げる。テキストは前回と同じく胡刻本『文選』に拠った。

詠懷詩——其九

歩出上東門
北望首陽峯
下有采薇土
上有嘉樹林
良辰在何許
凝霜霑衣襟
寒風振山岡
玄雲起重陰
鳴鴈飛南征
鸛鳴發哀音
素質遊商聲
悽愴傷我心

歩みて上東門を出で
北のかた首陽の峯を望む
下に采薇の土有り
上に嘉樹の林有り
良辰は何許にか在る
凝霜は衣襟を霑す
寒風は山岡に振るひ
玄雲は重陰を起こす
鳴鴈は飛びて南に征き
鸛鳴は哀音を發す
素質は商聲に遊り
悽愴として我が心を傷ましむ

歩いて、上東門を出て、北のかた、首陽山の峰を望む。この山のふもとには、薇を採って暮らしていた（ものの、ついには餓死した）伯夷・叔斉が眠り、山の上には、美しい樹木の林がある。ああ一体、良い日はどこにあるのか。今や、凍った霜が我が襟元をしめらせている。寒風は山や丘に吹きすさび、黒雲はあたりに暗い陰を起こしている。雁の群れが鳴きながら南に飛んでゆき、ほととぎすは（百草の芳香を奪う）悲しい泣き声をあげている。草木がしほみ衰えるのは、秋の商聲のためであり、このことは、鬱鬱として私の心を嘆き悲しませる。

歩出上東門 北望首陽峯

*冒頭四句は、自分も伯夷・叔斉のような態度をとり、隠棲したいことを述べる。

「上東門」洛陽城の東の三門のうち、最も北にある門。

「古詩十九首」〈其一三〉（『文選』二九）に「驅車東門、遙望郭北墓」（車を上東門に駆りて、遙かに郭北の墓を望む）とあり、李善注に「河南郡図經曰、東有三門、最北頭曰上東門」（河南郡図經に曰く、東に三門有り、最北頭を上東門と曰ふ）という。

「北望」『芸文類聚』七は「遙望」（遙かに望む）に作る。

「首陽峯」伯夷・叔斉がかくれ、周の穀物を食らわずに餓死したところ。『論語』季氏に「伯夷・叔斉は、餓於首陽之下」（伯夷・叔斉は、首陽の下に餓う）とある。黄節は阮籍「首陽山賦」序に「正元元年秋、余尚為中郎、在大將軍府、独往南牆下、北望首陽山、作賦」とあること、また、使用されている語彙も似通っていることから、「首陽山賦」とこの詩及び其三の詩を同時期の作品と見

ている。なお、正元元年（二五四）秋とは、司馬師が李豊・夏侯玄らを誅し、さらに、齊王芳が廃され、高貴郷公髦が擁立された直後の正元元年十月（暦の上では冬であるが）をいうのだろう。このとき、阮籍は四五歳。この詩の他に、首陽山を詠ったと思われるものに、其三、一三、二六、六四がある。

下有采薇士 上有嘉樹林

*「首陽山賦」に「聊仰首以広頼兮、瞻首陽之岡岑。樹叢茂以傾倚兮、紛蕭爽而揚音。下崎嶇而無薄兮、上洞徹而無依。鳳翔過而不集兮、鳴臯群而並栖」（聊く首を仰げて以て広く頼み、首陽の岡岑を瞻る。樹は叢茂して以て傾倚、紛蕭爽として音を揚ぐ。下は崎嶇として薄くなく、上は洞徹して依る無し。鳳は翔過して集まらず、鳴臯は群がりて並び栖む）とある。

「采薇士」伯夷・叔斉をさす。首陽山のふもとで餓死した。伯夷・叔斉については「詠懷詩」其三「西山」注、本詩「首陽峯」注を参照。「采」字、『六朝詩集』、『芸

文類聚』七、二六は「採」に作る。

「嘉樹林」嘉樹の林。『史記』龜策伝に「有神龜、在江南嘉林中。嘉林者、獸無虎狼、鳥無鴟梟、草無毒螫、野火不及、斧斤不至。是為嘉林」（神龜有り、江南の嘉林の中に在り。嘉林は、獸に虎狼無く、鳥に鴟梟無く、草に毒螫無く、野火及ばず、斧斤至らず。是れを嘉林と為す）とある。「嘉樹」は其三にも見える。尚、『六朝詩集』は「嘉樹林」を「佳樹林」に作る。

良辰在何許 凝霜霑衣襟

*以下六句は、首陽山を取り巻く、秋の厳しい自然環境を詠い、それを嘆く。

「良辰在何許」「良辰」は、日がらの良い日。吉日。曹大家「東征賦」（『文選』九）に「時孟春之吉日兮、撰良辰而將行」（時は孟春の吉日、良辰を撰びて將に行かんとす）とある。沈約は「良辰何許、言世路險薄、非良辰也」（良辰何許とは、世路險薄にして、良辰に非ざるを言ふなり）と説く。『六朝詩集』は「在何許」を「在何訴」（何をか訴ふるに在る）に作る。

「凝霜霑衣襟」「凝霜」は前出（其三）。王粲「七哀詩」二首（其二）（『文選』二三）に「迅風拂裳袂、白露霑衣衿」（迅風は裳袂を拂ひ、白露は衣襟を霑す）とある。「襟」字、『初學記』三は「衿」に作る。

寒風振山岡 玄雲起重陰

「山岡」「六朝詩集」は「山崗」に作る。

「玄雲起重陰」張衡「南都賦」（『文選』四）に「玄雲合而重陰、谷風起而増哀」（玄雲合して陰を重ね、谷風起りて哀しみを増す）とある。「首陽山賦」には「在茲年之末歲兮、端旬首而重陰」（茲の年の末歲に在りて、端めの旬の首にして陰を重ねぬ）とある。

鳴鴈飛南征 鷓鴣發哀音

「鳴鴈飛南征」「楚辭」九弁に「鴈邕邕而南遊兮、鷓鴣啁晰而悲鳴」（鴈は邕邕として南遊し、鷓鴣は啁晰として悲鳴す）とある。

「鷓鴣發哀音」「鷓鴣」はホトトギス。この鳥が鳴けば、百草が衰え、芳香が歇むと言われる。『楚辭』離騷に「恐鷓鴣之先鳴兮、使夫百草為之不芳」（恐らくは鷓鴣の先づ鳴きて、夫の百草をして之が為に芳しからざらしめんことを）とあり、補注には「一名杜鵑、常以立夏鳴。鳴則衆芳皆歇」（一名杜鵑、常に立夏を以て鳴く。鳴けば則ち衆芳皆な歇む）と説明される。「首陽山賦」には「蟋蟀鳴于東房兮、鷓鴣號乎西林」（蟋蟀 東房に鳴き、鷓鴣 西林に號く）とある。

素質遊商聲 悽愴傷我心

*「首陽山賦」には「時將暮而無儔兮、慮悽愴而感心」

（時は將に暮れんとして儔無く、慮は悽愴として心を感じしむ）とある。詠われる季節、心情が重なることから、「首陽山賦」とこの詩の制作時期が近いことをうかがわせる。

「素質遊商聲」「素質」は草木の萎み衰える様。沈約は「凋素の質」と説く。「遊」字、『文選』六臣注本は「由」に作り、『古詩紀』二九、『漢魏六朝一百三家集』、『兩漢魏晉十一家文集』は「游」に作る。沈約は「遊」の字、応に由に作るべし」と説くが、「遊」は「游」に通じ、

「游」は「由」に通じるので、誤りではない。「商聲」は五音の一つ。秋の聲。『礼記』月令に「孟秋之月、日在翼。……其音商」（孟秋の月、日は翼に在り。……其の音は商なり）とある。なお、鄭玄注に「秋氣和、則商聲調」（秋氣和すれば、則ち商聲調ふ）とある。

「悽愴傷我心」「悽愴」は痛み悲しむこと。『淮南子』本經訓に「愚夫愚婦、皆有流連之心、悽愴之志」（愚夫愚婦、皆な流連の心、悽愴の志有り）とあり、高誘注に「悽愴、哀悼之貌」（悽愴、哀悼の貌なり）とある。

詠懷詩一其十

北里多奇舞
濮上有微音
輕薄閑遊子
俯仰乍浮沈
捷徑從狹路
僂俛趣荒淫
焉見王子喬
乘雲翔鄧林
独有延年術
可以慰我心

北里には奇舞多く
濮上には微音有り
輕薄の閑遊子
俯仰し乍ち浮沈す
捷徑狹路に従り
僂俛として荒淫に趣く
焉んぞ見ん王子喬の
雲に乗りて鄧林に翔るを
独り延年の術有り
以て我が心を慰む可きのみ

北里にはあやしい舞踊が多く、濮水のほとりではみだらな音色がする。世の輕薄な遊び好きたちは、ひたすら世の流

れに身をまかせている。(王道を捨て)近道を通って狭路に入り、自ら努めて酒色に身をゆだねている。(彼らは)王子喬が雲に乗って鄧林を天がけることなど、どうして考えたりしようか。(今となつては)長生の術があるだけだが、(それだけが)私の心のせめてもの慰めである。

北里多奇舞 濮上有微音

「北里多奇舞」「北里」は殷の紂王が作らせた舞樂の名。
『史記』殷本紀に「(紂)好酒淫樂、嬖於婦人。愛妲己、妲己之言是從。於是使師涓作新淫聲北里之舞、靡靡之樂」
(紂)酒を好み淫樂し、婦人を嬖す。妲己を愛し、妲己の言に是れ従ふ。是に於て師涓をして新淫聲の北里の舞、靡靡の樂を作らしむとある。また、阮籍「樂論」にも「是以君子惡大凌之歌、憎北里之舞也」(是を以て君子は大凌の歌を惡み、北里の舞を憎むなり)と見える。
「濮上有微音」前句に挙げた『史記』殷本紀の中に「靡靡之樂」とあるのを受けて表現したものであろう。これも、紂が作らせたあやしい音曲で、濮水のほとりで聞かれたという。『礼記』樂記に「桑間濮上音、亡国之音」(桑間濮上の音は、亡国の音なり)とある。『史記』樂書には「衛靈公時、將之晉、至於濮水之上舍。夜半時聞鼓琴聲、問左右、皆對曰『不聞』。乃召師涓曰『吾聞鼓琴音、問左右、皆不聞。其狀似鬼神。為我聽而寫之』。師涓曰『諾』。因端坐援琴、聽而寫之。……明日、報曰『習矣』。即去之晉、見晉平公。平公置酒於施惠之台。酒酣、靈公曰『今者來、聞新聲、請奏之』。平公曰『可』。

即令師涓坐師曠旁、援琴鼓之。未終、師曠撫而止之曰『此亡国之聲也、不可遂』。平公曰『何道出』。師曠曰『師延所作也。與紂為靡靡之樂、武王伐紂、師延東走、自投濮水之中。故聞此聲必於濮水之上。先聞此聲者國削』(衛靈公の時、將に晉に之かんとし、濮水の上りに至りて舍る。夜半の時、琴を鼓する聲を聞けば、左右に問ふも、皆な對へて曰く「聞かず」と。乃ち師涓を召して曰く「吾、琴を鼓する音を聞き、左右に問ふも、皆な聞かず」と。其の狀、鬼神に似る。我の為に聴きて之を寫せ」と。師涓曰く「諾」と。因りて端坐して琴を援り、聴きて之を寫す。……明日、報じて曰く「習へり」と。即ち去りて晉に之き、晉の平公に見ゆ。平公、施惠の台に置酒す。酒酣にして、靈公曰く「今者來るに、新聲を聞けり、請ふ之を奏せんことを」と。平公曰く「可なり」と。即ち師涓をして師曠の旁に坐し、琴を援りて之を鼓せしむ。未だ終はらざるに、師曠撫へ之を止めて曰く「此れ亡国の聲なり、遂ぐ可からず」と。平公曰く「何れの道より出づるか」と。師曠曰く「師延の作りし所なり。紂と靡靡の樂を為るも、武王、紂を伐てば、師延、東に走げ、自ら濮水の中に投ず。故に此の聲を聞くは必ず濮水の上りに於いてなり。先に此の聲を聞くは

国削らる」と。）とある。また、『漢書』地理志下「衛地有桑間濮上之阻、男女亟聚會、聲色生焉。故俗稱鄭衛之音」（衛の地に桑間濮上の阻有り、男女亟聚會し、聲色生ず。故に俗に鄭衛の音と稱す）によれば、春秋時代に濮水のほとりに男女が集まり、淫らな音曲に興じたということである。阮籍は「東平賦」の中で「濮上」をかつて若い頃、自らが遊び、その風土を楽しみ、その後、十余日ではあつたが、太守にもなった東平の地のあたりのこととしている。「西則首仰阿・甄、傍通戚・蒲。桑間・濮上、淫荒所廬。三晉縱横、鄭・衛紛敷」（西は則ち阿・甄を首仰し、戚・蒲に傍通す。桑間・濮上は、淫荒の廬る所なり。三晉縦横たり、鄭・衛紛敷す）（阮籍「東平賦」）。「微音」、「兩漢魏晉十一家文集」は「微膏」に作る。

輕薄閑遊子 俯仰乍浮沈

「閑遊子」ひまで遊んでいる者。『古詩紀』二九、『漢魏六朝一百三家集』は「閑遊子」に作る。

「俯仰乍浮沈」時の流れに身をまかせ、俗に従って生きること。司馬遷「報任少卿書」（『文選』四一）に「身直為閭閻之臣。寧得自引於深藏岩穴邪。故且從俗浮沈、與時俯仰、以通其狂惑」（身は直に閭閻の臣為るのみ。寧ろ自ら引きて深く岩穴に藏るを得んや。故に且く俗に従ひて浮沈し、時と與に俯仰し、以て其の狂惑を

通ず）とある。「乍」字、『六朝詩集』は「作」に作る。

捷徑從狹路 僂僂趣荒淫

*『芸文類聚』二六にはこの二句はない。

「捷徑」近道。物事をてっとりばやくするための邪道。

「楚辭」離騷に「何桀紂之昌被兮、夫唯捷徑以窘步」（何ぞ桀紂の昌被なる、夫れ唯捷徑にして以て窘歩せり）とあり、王逸注に「捷疾也。徑邪道也」（捷は疾なり。徑は邪道なり）とある。

「僂僂」はげみつとめる様。『新書』勸学に「舜僂僂而加志」（舜僂僂として志を加ふ）とある。

「趣」『古詩紀』二九、『漢魏六朝一百三家集』、『兩漢魏晉十一家文集』は「趨」に作る。

「荒淫」酒色にすさみ溺れる。酒色の度をこすこと。司馬相如「上林賦」（『文選』八）に「徒事爭於游戲之樂、苑囿之大、欲以奢侈相勝、荒淫相越」（徒に游戲の樂、苑囿の大なるを争ふを事とし、奢侈を以て相勝ち、荒淫もて相越えんと欲す）とある。

*この部分について、李善は「輕薄之輩、隨俗浮沈。棄彼大道、好從狹路。不尊恬淡、競赴荒淫。言可悲甚也」（輕薄の輩、俗に隨ひて浮沈す。彼の大道を棄て、好みて狹路に従ふ。恬淡を尊ばず、競ひて荒淫に赴く。悲しむ可きことの甚だしきを言ふなり）と注する。

焉見王子喬 乘雲翔鄧林

*以下四句は『楚辞』遠遊による。

「焉見」「見」は考える、思う、の意。この二句における「見」という行為の主語は、作者である阮籍と取ることも可能だが、ここでは、作者ではなく、閑遊子の行為として考えた。其七五にこれと似たような用例がある。「路端便娟子、但恐日月傾。焉見冥靈樹、悠悠喬無形」(路端の便娟の子は、但だ日月の傾くを恐るのみ。焉んぞ見ん 冥靈の樹の、悠悠として無形を喬ふるを)。また、「東平賦」の中で、ここで暮らす人たちが、どうしようもなく怠惰で不真面目であることを詠っていることから、そのように判断できる。

「王子喬乘雲翔鄧林」「楚辞」九歎・遠遊に「譬若王喬之乘雲兮、載赤霄而凌太清」(譬へば王喬の雲に乗り、赤霄に載りて太清を凌ぐが若し)とある。「鄧林」は神獸の夸父が日輪と争った際に棄てた杖が林となったもの。楚の北境にある。『山海経』海外北経に「夸父與日競逐而渴死。其杖化為鄧林」(夸父 日と競逐し渴して死す。其の杖 化して鄧林と為る)とある。王子喬が鄧林を飛翔するという記述は、阮籍以前の文獻には見られない。阮籍はこれ以外にも、神仙や優れた才能を有する人物が集う場として「鄧林」を詠っている。「是以伶倫遊鳳於崑崙之陽、鄒子滄温於黍谷之陰、伯高登降於尚季之上、羨門逍遙於三山之岑。上敖玄圃、下遊鄧林」(是

を以て伶倫は鳳と崑崙の陽に遊び、鄒子は温を黍谷の陰に滄ひ、伯高は尚季の上に登降し、羨門は三山の岑に逍遙す。上は玄圃に敖び、下は鄧林に遊ぶ)(「東平賦」)。「是以英俊之士、願排皇闔、策名委質、真薦之徒、輻輳大府。誠以鄧林・昆吾、翔鳳所栖、懸黎・和肆、垂棘所集」(是を以て英俊の士は、皇闔を排くを願ひ、名を策き質を委き、真薦の徒は、大府に輻輳す。誠に鄧林・昆吾の、翔鳳の栖む所にして、懸黎・和肆の、垂棘の集ふ所を以てするなり)(「與晉王薦盧播書」)。なお、「鄧林」は其二二、五四にも見える。

独有延年術 可以慰我心

「延年術」「楚辞」遠遊に、屈原が王子喬に出会い、神仙の術を授けられたことが記述されている。ここでは、屈原によって記され、伝えられたその術のことをいっているのかもしれない。「吾將從王喬而娛戲、餐六氣而飲沆瀣兮、漱正陽而含朝霞。……見王子而宿之兮、審壹氣之和德。曰『道可受兮、而不可伝。其小無内兮、其大無垠。毋滑而魂兮、彼將自然。壹氣孔神兮、於中夜存。虚以待之兮、無為之先。庶類以成兮、此德之門』。聞至貴而遂徂兮、忽乎吾將行。仍羽人於丹丘兮、留不死之旧郷」(吾將に王喬に従ひて娛戲せんとし、六氣を餐ひ沆瀣を飲み、正陽に漱いで朝霞を含む。……王子に見えて之に宿み、壹氣の和德を審にす。曰く「道は受く可く

して、而も伝ふ可からず。其れ小なるは内無く、其れ大なるは垠かぎり無し。而の魂を滑みだすこと母れ、彼將に自然ならんとす。壹氣孔はなはだ神にして、中夜に於いて存す。虚以て之を待つ、無為の先なり。庶類以て成す、此れ徳の門なり」と。至貴を聞きて遂に徂ゆぎ、忽乎として吾將に行かんとす。羽人に丹丘に仍り、不死の旧郷に留

まらん。)
「慰我心」我が心を慰なぐさめ安んずる。『毛詩』大雅・烝民に「仲山甫永懷、以慰其心」(仲山甫 永く懷おもふ、以て其の心を慰なぐさむ)とある。「以」字、『六朝詩集』は「用」に作る。「我」字、『兩漢魏晉十一家文集』は「吾」に作る。

詠懷詩其十一

*この詩には楚国の故事が随所に用いられ、楚国のことを詠うことで、今の世の中を諷刺している。

湛湛長江水	湛 たん 湛 たん たる 長江の水
上有楓樹林	上 ほどり に 楓樹 ふうじゆ の林有り
皐蘭被徑路	皐蘭 かうらん 徑路を被 ひ ひ
青驪逝駸駸	青驪 せいり 逝 ゆ きて駸駸 しんしん たり
遠望令人悲	遠く望めば 人をして悲しましめ
春氣感我心	春氣 我が心を感じしむ
三楚多秀士	三楚 秀士多く
朝雲進荒淫	朝雲もて 荒淫 くわういん を進む
朱華振芬芳	朱華 芬芳を振るひ
高蔡相追尋	高蔡 相追尋 つあじん す
一為黃雀哀	一たび黃雀の為に哀 かな しまば
涕下誰能禁	涕下 なみだ りて 誰か能く禁 とど めん

深くたたえながら長江の水は流れゆき、そのほとりには楓の林がある。水辺の蘭は、小道を覆うばかりに茂り、その道を黒毛の馬が疾風のごとく走り去ってゆく。はるかかなたからこの景色を眺めると、悲しみの情がわき起こり、春の気配が（かえって）私の心を感傷的にする。昔、三楚の地には、すぐれた人が多かったが、（中には）朝雲という美女の話をして（君に）みだらなことを薦めた者もいた。朱い華がかぐわしい香りを放つのにつられるように、（霊公は）高蔡の地で美女を追い回したという。一度、黄雀の悲しみに思い至れば、（こうした人たちのことが次々と思ひ浮かび）とめどなく涙が流れ出るのである。

湛湛長江水 上有楓樹林

*この詩の冒頭六句は『楚辞』招魂に「皐蘭被徑兮、斯路漸。湛湛江水兮、上有楓。目極千里兮、傷春心。魂兮归来、哀江南」（皐蘭 徑を被ひ、斯の路 漸る。湛湛たる江水、上に楓有り。目は千里を極め、春心を傷ましむ。魂よ、帰り来れ、江南哀し）とあるのをふまえている。

「湛湛」水の深く湛え満ちた様。

「楓樹」かえでの樹。

皐蘭被徑路 青驪逝駸駸

「皐蘭被徑路」「皐蘭」は水ぎわに生える蘭。其十一に「清露被皐蘭、凝霜霑野草」（清露は皐蘭を被ひ、凝霜は野草を霑す）とある。

「青驪」黒毛の馬。毛に光沢があつて、青みを帯びているのでいう。『楚辞』招魂に「青驪結駟兮、齊千乘」（青驪に駟を結びて、千乗を齊ぶ）とある。

「逝」「六朝詩集」は「遊」に作る。

「駸駸」馬が疾風のごとく走る様。『詩經』小雅。四牡に「駕彼四駟、載驟駸駸」（彼の四駟に駕して、載ち驟すること駸駸たり）とある。

遠望令人悲 春氣感我心

*以下の句もすべて楚の国の故事を詠う。

「春氣」「六朝詩集」は「盛氣」に作る。

三楚多秀士 朝雲進荒淫

「三楚多秀士」「三楚」は呉の東楚、江陵の南楚、彭城の西楚をあわせたもの。『漢書』高帝紀上にある「二月、羽自立、為西楚霸王」（二月、羽自立し、西楚の霸王と為る）の孟康注に「旧名江陵為南楚、呉為東楚、彭城為西楚」（旧 江陵を名づけて南楚と為し、呉を東楚と為し、彭城を西楚と為す）とある。また、『說苑』善説に「蘧伯玉曰、楚最多士」（蘧伯玉曰く、楚 最も士多し、と）とある。

「朝雲」楚の懷王に寵愛された神女の名。宋玉はこの神女のことを楚の襄王に語って聞かせた。宋玉「高唐賦」(『文選』十九)に「昔者、先王嘗遊高唐、怠而昼寢、夢見一婦人。……王因幸之。去而辞曰、『妾……旦為朝雲、暮為行雨、朝朝暮暮、陽台之下』。旦朝視之如言。故為立廟号曰朝雲」(昔者、先王嘗て高唐に遊び、怠りて昼寝ね、夢に一婦人を見る。……王因りて之を幸す。去るとき辞して曰く「妾……旦に朝雲と為り、暮には行雨と為り、朝朝暮暮、陽台の下にあり」と。旦朝に之を視れば言の如し。故に為に廟を立て、号して朝雲と曰ふ)とある。

朱華振芬芳 高蔡相追尋

「朱華」『兩漢魏晉十一家文集』は「未華」に作る。

「高蔡」地名。蔡の靈公が佳人を追ひ回し、国を滅ぼすに至った故事による語。『戦国策』楚策に「蔡靈公之事、因是以。……左抱幼妾、右擁嬖女、與之馳騁乎高蔡之中、而不以国家為事」(蔡の靈公の事、是に因るのみ。……左に幼妾を抱き、右に嬖女を擁し、之と高蔡の中に馳騁して、国家を以て事と為さず)とある。『六朝詩集』は

詠懷詩——其十二

昔日繁華子

昔日繁華の子に

「高蔡」に作る。

「追尋」追隨する。其二二に「王子好簫管、世世相追尋」(王子簫管を好み、世世相追尋す)とある。

一為黃雀哀 涕下誰能禁

「黃雀」得意がつていると、あつという間に滅ぼされてしまうことのたとえとして用いられる。『戦国策』楚策に「黃雀因是以。俯囓白粒、仰栖茂樹、鼓翅奮翼、自以為無患、與人無争也。不知夫公子王孫、左挾彈、右攝丸、將加己乎十仞之上、以其類為招。昼游乎茂樹、夕調乎酸醎」(黃雀も是に因るのみ。俯して白粒を囓み、仰ぎて茂樹に栖み、翅を鼓し翼を奮ひて、自ら以為へらく患無く、人と争ふ無きなりと。夫の公子王孫の、左に彈を挾み、右に丸を攝りて、將に己に十仞の上に加へんとし、其の類を以て招きと為すを知らず。昼は茂樹に遊ぶも、夕には酸醎に調へらる)とある。

「禁」止まる。『孔叢子』抗志に「吾念周室將滅、泣涕不可禁也」(吾周室の將に滅びんとするを念ひ、泣涕して禁む可からざるなり)とある。

安陵與龍陽

天天桃李花

灼灼有輝光

悅懌若九春

馨折似秋霜

流眄發姿媚

言笑吐芬芳

携手等歡愛

宿昔同衣裳

願為双飛鳥

比翼共翱翔

丹青著明誓

永世不相忘

安陵あんりようと龍陽りゅうやうとあり

天天たる桃李の花のごとく

灼灼として輝光有り

悦懌えつえきせらるること九春の若く

馨折けいせつ秋霜に似たり

流眄りゅうめんして姿媚しびを發し

言笑げんせうして芬芳を吐く

手を携たづさへて歡愛を等しうし

宿昔衣裳を同じうす

願はくは双飛の鳥と為り

翼なはを比べて共に翱翔せん

丹青もて明誓を著し

永世相忘れざらんとす

その昔、あでやかな美貌の持ち主に、楚王に寵せられた安陵君と魏王に愛された龍陽君とがいた。彼らは美しい桃李の花のように、華やかに光り輝いていた。九春（春の九十日）のごとく喜ばれ、秋霜（に手折られる草木）のようにひれ伏していた。流し目をすれば、媚びがこぼれ、口を開けば、（神女のような）ほのかなよい香りが漂った。主君と手を取り合っては歡びをともにし、夜な夜な寢床を同じくしていた。つがいの鳥となつて、翼をならべてともに飛ばんことを願ひ、かくて、赤と青の色で明らかなる誓いの言葉をあらわし、いついまでもお互いのことを忘れまいと努めたのだ。

昔日繁華子 安陵與龍陽

「繁華子」ここでは、あでやかで美しい人、美貌の持ち主をいう。

「安陵與龍陽」「安陵君」、「龍陽君」ともに男色を以て君主（『文選』李善注は、楚の共王のこととしているが、これは誤り。それぞれ、楚の共王、魏の安釐王）に寵愛された。「安陵君」については、『說苑』權謀に「安陵

纏以顔色美壯、得幸於楚共王。……江乙曰『吾聞之、以財事人者財盡而交疎、以色事人者華落而愛衰。今子之華有時而落。子何以長幸、無解於王乎』。……其年、共王獵江渚之野、野火之起若雲蜺、虎狼之嗥若雷霆、有狂兇從南方來、正触王左驂。王举旌旆、而使善射者射之、一兇死車下。王大喜拊手而笑、顧謂安陵纏曰『吾万歳之後、子將誰與斯樂乎』。安陵纏乃逡巡而却泣、下沾衿、抱王曰『万歳之後、臣將從為殉。安知樂此者誰』。於是共王乃封安陵纏於車下三百戸。故曰、江乙善謀、安陵纏知時」(安陵纏 顔色之美壯なるを以て、楚の共王に幸せらるるを得たり。……江乙曰く「吾之を聞く、財事を以てする人は財盡くれば交はり疎く、色事を以てする人は華落つれば愛衰ふ、と。今子の華は時有らば落つ。子は何を以て長く幸せられ、王に解かるること無からんか」と。……其の年、共王 江渚の野に獵し、野火の起りて雲蜺の若く、虎狼の嗥ゆること雷霆の若く、狂兇の南方従り来る有りて、正に王の左驂に触れんとす。王旌旆を挙げて、善射の者をして之を射せしむれば、一たび兇して 兇は車下に死す。王大いに喜びて手を拊ちて笑ひ、顧みて安陵纏に謂ひて曰く「吾万歳の後、子誰を將めて斯の楽しみに與らんや」と。安陵纏 乃ち逡巡して却き泣き、下に衿を沾し、王を抱えて曰く「万歳の後、臣従を將めて殉を為さん。安んぞ此を楽しむ者の誰なるかを知らんや」と。是に於いて共王 乃ち安陵纏を車下三百戸に封ず。故に曰く、江乙 謀を善くし、

安陵纏 時を知る、と。)とある。また「龍陽君」については、『戦国策』魏策に「魏王與龍陽君、共船而釣。龍陽君得十余魚而涕下。王曰『有所不安乎。如是不相告也』。对曰『臣無敢不安也』。王曰『然則何為涕出』。曰『臣為臣之所得魚也』。王曰『何謂也』。对曰『臣之始得魚也、臣甚喜。後得又益大。今臣直欲棄臣前之所得矣。今以臣之凶惡、而得為王拂枕席。今臣爵至人君、走人於庭、避人於途。四海之内、美人亦甚多矣。聞臣之得幸於王也、必褰裳而趨大王。臣亦猶曩臣之所得魚也。臣亦將棄矣。臣安能無涕出乎』。魏王曰『誤、有是心也、何不相告也』。於是布令於四境之内曰『有敢言美人者族』」(魏王は龍陽君と、船を共にして釣る。龍陽君 十余魚を得て涕下る。王曰く、「安からざる所有るか。是の如くんば何ぞ相告げざる」と。对へて曰く「臣敢へて安からざる無きなり」と。王曰く「然らば則ち何為れぞ涕の出づる」と。曰く「臣は臣の得たる所の魚為り」と。王曰く「何の謂ぞや」と。对へて曰く「臣の始めて魚を得たるや、臣甚だ喜べり。後に得ること又た益々大なり。今、臣 直に臣の前に得たる所を棄てんと欲す。今、臣の凶惡を以て、王の為に枕席を拂ふを得たり。今、臣 爵は人君に至り、人を庭に走らせ、人を途に避けしむ。四海の内、美人亦た甚だ多し。臣の王に幸せらるるを得るを聞かば、必ず裳を褰げて大王に趨らん。臣も亦た猶ほ曩に臣の得たる所の魚のごときなり。臣も亦た將に棄てられんとす。臣、安くんぞ能く涕の出づること無からんや」

と。魏王曰く「誤れり、是の心有るや、何ぞ相告げざるや」と。是に於いて令を四境の内に布きて曰く「敢へて美人を言ふ者有らば族せん」と。」とある。

夭夭桃李花 灼灼有輝光

「夭夭・灼灼」「夭夭」は若く美しい様。「灼灼」は華やかに明るい様。嫁ぎゆく若々しい娘を詠った『詩経』周南・桃夭の「桃之夭夭、灼灼其華」(桃の夭夭たる、灼灼たり其の華)に基づく。

「桃李」『古詩紀』二九は「桃李」に作る。また『漢魏六朝一百三家集』は「桃李」に作る。

悦懌若九春 磬折似秋霜

*人々が安陵君、龍陽君の前でこ機嫌をとるために磬折した、とする説もあるが、ここではとらない。

「悦懌」喜び楽しむ。『説苑』反質に「顔色不悦懌」(顔色悦懌せず)とある。其十九、其五五にもそれぞれ「悦懌未交接、晤言用感傷」(悦懌するも未だ交接せず、晤言して用て感傷す)「悦懌猶今辰、計校在一時」(悦懌すること猶ほ今辰のごときも、計校一時に在り)とある。

『六朝詩集』は「悦懌」に作る。

「九春」春は三ヶ月であるから、三春を一年とし、九春を三年とする説もあるが、ここでは、春の九十日間、の意にとる。曹植「雜詩」―其三(『文選』二九)に「自

期三年帰、今已歴九春」(自ら期す三年にして帰らんと、今已に九春を歴)とあり、これについて、李善は「一歳三春。故以三年為九春。言已過期也。纂要曰、九十日。故九春」(一歳は三春。故に三年を以て九春と為す。言ふところは已に期を過ぐるなり。纂要曰く、九十日。故に九春なり)と注している。

「磬折」自分の体や心をまげて君主に仕えること。「磬」は樂器。「く」の字のように曲がつており、人が腰を曲げることになたとえた。『尚書大伝』に「諸侯来受命。周公莫不磬折」(諸侯来りて命を受く。周公磬折せざることを莫し)とある。また、其八にも「如何当路子、磬折忘所帰」(如何ぞ当路の子は、磬折して帰る所を忘る)とある。『六朝詩集』、『類聚』三三は「磬折」に作る。また『兩漢魏晉十一家文集』は「磬折」に作る。

流眄発姿媚 言笑吐芬芳

「流眄」流し目に見る。張衡「西京賦」(『文選』二)に「眇眇流眄、一顧傾城」(眇眇流眄すれば、一顧して城を傾く)とあり、李善は「流眄、転眼貌也」(流眄、眼を転ずるの貌なり)と注している。また、其一九にも「飄飄恍惚中、流眄顧我傍」(飄飄恍惚の中 流眄して我が傍を顧みる)とある。

「姿媚」姿のなまめかしさ。『玉台新詠』二は「媚姿」に作る。

「言笑」ものを言い、かつ笑うこと。『詩経』衛風・氓に「總角之宴、言笑晏晏。信誓旦旦、不思其反」（總角の宴、言笑晏晏たり。信誓旦旦たり、其の反せんことを思はざりき）とある。

「吐芬芳」かぐわしいにおいの息を吐くこと。宋玉「神女賦」（『文選』一九）に「陳嘉辭而云對兮、吐芬芳其若蘭。精交接以來往兮、心凱康以樂歎」（嘉辭を陳べて云に對すれば、芬芳を吐くこと其れ蘭の若し。精交接して以て來往し、心凱康して以て樂歎す）とある。『六朝詩集』は「紛芳」に作る。

携手等歡愛 宿昔同衣裳

「宿昔」夜毎に。夜な夜な。「宿」は李善注引『広雅』によると「宿、夜也」となっている。また、「昔」は『広雅』釈古に「昔、夜也。」とある。

「同衣裳」『玉台新詠』二、『類聚』三三は「同衾裳」に作る。「衾裳」はふすま。ここは「衾裳」の方がよいと思われる。

願為双飛鳥 比翼共翱翔

「双飛鳥」「為焦仲卿妻作」（『玉台新詠』一）に「中有双飛鳥、自名為鴛鴦。仰頭相向鳴、夜夜達五更」（中に双び飛ぶ鳥有り、自ら名づけて鴛鴦と為す。頭を仰げて相向ひて鳴き、夜夜五更に達す）とある。これによれ

ば、鴛鴦ということになる。

「比翼」『爾雅』釈地に「南方有比翼鳥焉、不比不飛、謂之鵽鵽」（南方に比翼の鳥有り、比せざれば飛ばず、之を鵽鵽と謂ふ）とある。

「翱翔」飛び回る。翼を上下するのが「翱」、張って動かさないのが「翔」。

丹青著明誓 永世不相忘

「丹青」赤と青の色。はつきりして変わらないことから誓いを立てるときに用いられた。李善注引『東觀漢記』に「光武詔曰、明設丹青之信、開広束手之路」（光武詔して曰く、明らかに丹青の信を設け、広く束手の路を開く）とある。

「永世」永遠に、いつまでも。